平成 27 年度第 1 回弘前市立郷土文学館運営委員会会議

平成 28 年 2 月 18 日（木）13：30～14：40
弘前図書館 2 階視聴覚室

出席者：船越委員長、齋藤委員、山本委員、松田委員

郷土文学館側：伊藤図書館長、柴田図書館長補佐、田澤総務係長、三上整理係長、斎藤主事、舘田企画研究専門官

委員長	（挨拶省略） 　本日提案されております案件について、事務局より説明をお願いします。
田澤係長	（案件 1 説明…省略）
委員長	郷土文学館の方からはこれまでと大きく変わった状況というのはなかったということでよろしいでしょうか？
田澤係長	はい。
委員長	例えばこういう企画展をやる時に陸羯南については、去年から今年にかけては博物館でもありましたし、舘田先生も博物館で講演なさったりしているみたいです。そのあたりは博物館との連携はあるものでしょうか？　同じ市立ですし市立博物館の展示と文学館の展示とどんなふうにするかとか、役割分担でもないけれども、打合わせのようなものはあるのでしょうか？
舘田企画研究専門官	博物館と郷土文学館は特に会議を開催してはございません。それぞれの資料を相互に利用できるという共通理解を持っています。特に文学館の場合、博物館にある資料でよく適宜利用しているのは、笹森儀助関係の資料です。それが実は博物館の方に寄託されているものがあるのです。博物館でも利用していますけれども、当館においても利用という形で進めてきています。特に博物館と文学館が協力しているということは今まではありませんでした。今回は羯南展ということで場所を変えての実施となりましたけれども、それぞれの資料を利用できたということは大変素晴らしかったものと思っていました。
委員長	他によろしいですか？ないようなので次にまいりましょうか。
田澤係長	（案件 2 説明…省略）
委員長	ただいまの説明に対して質疑応答はございませんか？
委員	毎回入場者数については頭を痛めているところで昨年と同じことでご

	ざいますけれども、いろいろな企画展にご尽力頂いているにもかかわらず、前年度を上回るというのはなかなか厳しい状況になっています。それがここのところの傾向としてあるものですから、郷土文学館のファンとしてはすごく気になっています。このことについては質問のしようもなく、逆に私どもの方からエールを送らざるを得ないのですけれども、できるだけ入館者数を増やしていくようにご努力を続けて頂ければありがたいと思います。時々私も郷土文学館に来るので、カウントされていると思いますが、すごく良い展示をしているのだけれどもなかなか足が遠のくというのでしょうか。みなさんに告知する方法も含めて何らか今一つの努力が必要なのかもしれないなと思う次第です。質問ではなくてお願いということで申し訳ございません。
委員長	他にございませんか？
舘田企画研究専門官	ただ今の件ですが、観覧者が少ないのはよその文学館もほとんど似たような傾向です。ここが特別という訳ではありません。当文学館の場合、新聞社とかアップルウェーブとかマスコミも利用して入館者が増えるようにやっているのですけれども、アップルウェーブや新聞に出るとその時の一週間くらいは数が増えています。なにぶん期間が長いものですから、一回取り上げるともうほとんど取り上げなくなる。一年間やっているため何回も取材に来てほしいとお願いしているのですけれども、一回来ると来ないです。そういうところも一つの悩みです。
委員	追加確認でお聞きしますが、有料観覧者数について、さまざまな年齢とか、市内、市外、県外とかそういうデータは取っていますか？　私が郷土文学館に来た時に、明らかにこのグループは青森県人のグループではないという人たちがいたものですから、我々は今舘田専門官がおっしゃったように、メディアとしては身近なメディアを使って PR は当然するのですけれども県外の人も来ていると思えば、そういう人たちに対しての PR 活動というのも、方法は分からないですけど、できるならやれればいいなと思いまして、せっかくであればそういう統計というかアンケートを含めたものを来館者に対してとるということもご検討頂ければありがたいと思いました。
委員長	昨年市内の留学生とか外国人の方たちにもっと来てもらったらどうでしょうかという話が出まして、彼らは彼らなりのネットワークを持っているからどんどん伝わっていくようにしたらどうでしょうかということだったのですが、特別多かったのが 15 年度と 17 年度ですか。あとは 24 年度にありますけれども、少ないと感じるなら継続してそれが伝わっていないような感じはします。留学生たちはかなりの数今来ていますね。

	どういう形で海外の方たちに伝えているのだろうということをお聞きしたいところですが、昨年確かこれテーマになったはずでした。
館長	どこかで企画して、留学生がここだけではなくいろんな施設と合わせて外国人のための勉強会みたいにやっている可能性はあると思いますが、裏付けは取っていません。
委員長	例えば留学生のいる学院や弘大の研究室に情報を流してもらえばどうでしょうか。ここの資料はすごくて、展示もかなり専門的なことがたくさん分かります。やはり発信しないとダメかなという気がします。 紙媒体は私のような年寄り向けだそうで、若い人たちはみんなWebで情報を得て、就活などで集まったりするというのですが、そうすると大学生を呼び込もうとするならそういうことなのかなって思います。だから郷土文学館、図書館Webサイトみたいなものがあってもいいのかもしれません。そうするともう少し若い人たちが来るのかもしれないと思いました。
舘田企画研究専門官	弘前大学でも授業でここを利用していることがあって、そういう時には先生が連れて来ているのですけれども、それ以外の大学生はやはりみなさん忙しくてここへ来ないのかなという感じがします。いわゆる大学の一コマの授業の中でここを取り上げて頂くという場合については30名単位などで来て頂けるので大変嬉しいです。
委員長	私の知っている人がALTでこちらへやってきて、ロンドンの金融関係にいたのがここで葛西善蔵の言葉を見つけたらしいのです。それで心を打たれてしまって、お金じゃないなって、写真家になってしまったのです。金融から一転してアーティストになったのです。外国の方でもそんなふうに文学に触れて人生変える人もいるわけで、それだけ津軽の文学者の言葉に心打たれる人がいるのだということを考えると、やはり発信することは大事かなという気がしました。
舘田企画研究専門官	留学生の話ですが、昨年確か英語版のパンフレットを作って各大学の方に配布してもらったりしましたけれども、反応はいまいちでした。ここでも韓国語とか英語、フランス語とか県内の展示している作者以外のことも含めて、外国語に訳されているものは全部並べて展示しているわけです。そういうこともきっかけになればいいなと思ってやっているのですけれども、まだまだです。
委員長	そのパンフレットはまだ残っていますか？
舘田企画研究専門官	あると思います。
委員長	他に何かありますか？

委員	図書館にはたくさんいろんな人が来ているわけです。気楽に図書館に来たついでにちょっと見てみようかという雰囲気がないのです。そのへんを図書館と一緒にやっていけると、お互いに流通できるようにして、郷土文学館に入っても、例えば何もわからない小学生が入って、ちょっと声をかけて「何やってるの？」とか聞ける、そういう雰囲気です。それは難しいのかもしれませんけれども、お互い隣り合っているのだから一緒に何かやろうというものがあればいいなと思います。そうすればもう少し気楽に人も動くと思います。
委員長	例えば入口に椅子を並べてティールームのようにみなさんが集まってお話したり、一戸謙三の詩を朗読する人がいたりしてちょっと茶話会のようなアットホームな感じがして、何やっているのだろうと思って入って来れるような雰囲気がある方が良いのかもしれないですね。
舘田企画研究専門官	それは少し面倒なのです。結局入って来る人がいるわけですよ。それやっている時に、普通の人が入って来て見られるような状況では、うるさいと言われるのですよ。難しいところです。まったく別の部屋がないですから。
委員長	図書館の方からうるさいといわれるのですか？
舘田企画研究専門官	結局、小さい声だと大きい声でやってほしいという参加する人からの声が出ます。
委員長	外から見えると、人が集まっていると何だろうって思って入ってくるのでしょうけど、そうするとそれは図書館にとってはうるさいと感じる人がいるのですね。
舘田企画研究専門官	文学館内でも見学目的だけで来ている方もいらっしゃる。
委員長	では次よろしいでしょうか？
田澤係長	（案件 3 説明…省略）
委員長	ただいまの説明に対してご意見ご質疑等ございませんか？
委員	手数料は何ですか？
田澤係長	写真パネル等の展示物作成にかかる経費が 20 万円ということで 10 万円のものを 2 回作成するという内訳になっております。
委員	委託料が意外にかかっていることにびっくりしたのですけれども、ある種特別な注文ということでしょうか。
舘田企画研究専門官	ビデオの制作も入っています。

田澤係長	1 点だけの制作ではなくてどんな規格のものを何点か作るという仕様になっていますので、総額で予算は 80 万になります。それで指名競争入札を行っているということになります。
舘田企画研究専門官	今回福士幸次郎展をやっていますけれども、展示が全部そういう形で委託になっています。写真のパネルや、キャプションは 200 枚以上あります。そういうものを全部作ってもらって、全体の展示のケースの中にどういうふうに展示するかなど、こちらの方では展示する材料などを提供するわけですけれども、展示方法は業者の力を借りてやっています。DVD も制作をお願いしていますけれども、これが意外と手間がかかっています。
委員	参考までに、その業者は弘前市内の業者ですか？
田澤係長	市内となっております。
委員長	感想ですけれども、委員になってから案内が来ると必ず展示を見て、北の文脈ニュースもしっかり目を通すようになり、すごく楽しそうに書かれているなというのが分かって、ふと思ったんです。北の文脈ニュースの楽しい感じのところが、実際の展示の時には楽しさが少し失われて、少し学術的になっているような気がするのです。 展示をどうするかって、高校の教師で見に行った人たちが、例えば羯南のことをやっていた時でも、細かいいろんな資料が羯南とどう関係するのかなど分からないというわけですよ。高校教師のレベルで分からないとすれば、小中高校生では無理だと。資料を見に来ても、その資料の素晴らしさを素敵に見せる部分と、北の文脈ニュースのように見ておもしろいと思わせる部分とをどううまくまとめていくかを考えないと、入場者数は増えないかなと思います。小学校の子たちが来ておもしろい、羯南ってこんな人だったのかっていう話にはなかなかなっていかないかなという気がとてもしたのです。 そうすると文学館をどの層に向けて発信していくかということや、あるいは専門家たちに見せたい部分のコーナーとそうでないのを分けるとか、企画展によって対象を違えて考えるなど少し区分けして考えた方がいいのかなとか思いました。英語で文学館ってどんぴしゃの単語はないですけど、ライターズミュージアムというと見た目楽しい感じになっていて、小説家の生涯を見せたり、あるいは部屋が出来上がったりしていてひょっとすると美術館みたいになっていたりとか、どういう仕掛けで見せていくかが難しいかなと思いました。
委員	指定管理者制度のことになると、また別なことなのでしょうか。
委員長	そういうことも話をしていいと思います。指定管理者制度を踏まえて

	来年度ということであれば話しましょう。
委員	いろいろと出た要求が入館者増とか、企画展の見せ方とか、図書館と郷土文学館の交流、展示の方法、誰に向けて発信したら良いかなど、ずいぶん難しく、かつ量もある課題なのですけれども、これをそのまま指定管理に引き継ぐこととなると、それは解決できないですよね。これは酷な話だなと私は思いました。指定管理で代行したとしても、すぐにそんな簡単に入館者が増えるとは思わないし、展示の仕方だって基本的には変わらないわけでしょうし、相変わらず 100 円という有料のシステムはあるのだろうし、図書館との間には曇りガラスの大きい扉があるし、そのことを全部指定管理者に預けるというのは、なった方がかわいそうだなと思うのですけれども。同時にこういう運営委員会みたいなものは継続されるのですか？
館長	それはそのつもりでおります。
委員	その時には指定管理者の方にお世話になるのですか？
館長	それと、教育委員会の担当課と一緒に進めると思います。
委員	すごく言葉を選ばずに言うと教育委員会の担当の方が来て、出た要望に対して一言言うと指定管理者は頑張りますって言うしかないのかと思うと、何だかそれもつれないなあと思ったりします。
館長	もちろんできるものできないものがあると思いますが、何かのアイデアは出るかもしれないし、あるいは担当課からこういうやり方もあるよとアドバイスできるかもしれません。館の中の扱い方などは我々の方が覚えていますから。でも館全体については、全てクリアはできないと思います。
委員	そうですよね。そこはある意味では教育委員会の所管する方々が相当応援しないとならないし、もしくは長い目で見ないと、指定管理者が板挟みになったら何のための指定管理だったのかということになります。 この福士幸次郎の資料は膨大じゃないですか。これを借りてくるのも含めてというのは、たぶん市だからできるような気がします。最も大事なそういう企画展のところが手薄になると、リスクが大きいと私は懸念します。そういうポジションの人間をしっかり確保できるという保証がないと、簡単なことではない気がしています。
委員	いくつか問題あるのは、いわゆる入場者数をどうカウントしてその数をどう意味づけるかというのは結構難しいことだと思う。去年より増えたから中身が充実していたかというと、そうかなということもあるだろうし、減った大きな理由は何かを分析しているか。時間が必要だと私は思う。

	それから学校現場とどういう形で連携を取っていくか。市の小中、高校も含めてこれだけの児童・生徒がいるのだから、そのメンバーをどう動かすか、具体的にどういうふうに連携を強化していくか。そこのところを一つに絞って考えていくと、それはまた次のステップにもなると思う。なぜそう思うかというと、青森県立図書館で、小学生をお父さんお母さんが一回連れて来ると、中学校になって部活やったり高校入試終わった後でまた来るという。それを青森県立図書館の職員が全部チェックしている。あの子は小学校の時に来た子だ、来たことがある子だと。いかに小学生を巻き込むということが大事なことか、それをずっと続けていけば、その数に関して言えば連続的継続的になると思うのです。だから指定管理者も来館数をただ増やすだけじゃなくて、増やすための方法・手段というものをどういうところに見つけていくか。みんなで知恵を絞っていけばいいのかなと思う。 それからイベントの中でいわゆるレベルが高い、全国の図書館というのはすごく様変わりして従来の図書館とは全然違う、文学館も同じですけれども、見せ方が違う。図書館文学館が一つのコミュニティになっているのです。人がそこに集まっていて、本も文学館のイベントも含めて一つのコミュニティになっているという空間にするためにはどうすればいいか。そのへんの視点を変えていくことが必要かな。指定管理者にただ数を増やせというのは非常に酷な問題だ、というのはまったくその通りで、そのへんを行政側とタイアップし協力し合って、こういう見せ方もあるというものを全国のいろんなケースを真似するというか参考にするというか、そういう方法もあるだろうと思う。 留学生の件は、すごくいい着眼点だと思う。なぜそう考えるかというと、学びの家で弘前大学のフランス語の講座の先生がフランス人を連れて、太宰の津軽弁とフランス語とすごく似ていますよという観点からイベントをやった。つまり太宰の作品を津軽弁で一本読ませて、片一方をフランス語で読ませた。似ているところがすごくあるという。そういう興味あるいは関心のひき方というのも考えられる。
委員長	石坂洋次郎展に対して何かご提案とか企画はありますか？
委員	今年の 10 月 7 日が命日ですが、没後 30 年という節目の年ですので、弘前ペンクラブの方から言うと、石坂洋次郎の映画上映と講演、今のところは長部日出雄さんに講演をお願いして、快諾を得ました。ぜひペンクラブの企画には積極的に参加したいと、そういうメッセージがありました。
舘田企画研究	二階の方が実は石坂洋次郎の記念室なのです。面積は下の展示室の半

専門官	分以上を占めるようなもので、さらに石坂洋次郎展をやろうとすると、かなりテーマを絞らなきゃならない。ですから石坂洋次郎をやるかまた別な人になるかそのへんは担当者が決めなければならないことです。今のところ二階でだいたい生涯がわかるようになっています。
委員	何かもう少し泥臭かった、葛西善蔵に泣きつかれたころの石坂洋次郎を見たいなと思ったりします。
船越委員長	石坂洋次郎をあまり読まないっていう人たちに読んでもらう、単に講座ではなく、みんなで読もうよという感じのものを文学館でやってみたらどうか。おもしろいキャッチコピーをつけて石坂洋次郎の『若い人』を読もうと。石坂洋次郎をもっとビビッドなものとして読んでもらうということをやれば、読者層が増えるような気がします 時間がきましたのでこれを持ちまして平成27年度第1回弘前市立郷土文学館運営委員会を閉会いたします。郷土文学館長より挨拶がございます。
館長	（挨拶省略）